# 鴨東通信

夏

2012.7 No.86

◉東山歴史逍遙　其四
アカマツヲ除外スルコトハ望マシカラズ　中嶋節子

◉てぃーたいむ
歴史災害が語る人々の営み　吉越昭久・片平博文・塚本章宏

◉エッセイ
阿蘇下野狩から草原の歴史を読む　飯沼賢司
県庁へ行こう！　田中智子

◉リレー連載　世界のなかの日本研究11
裏側からみた日本―サン・パウロで日本を論じる　稲賀繁美

◉史料探訪
鼠草子絵巻　池田芙美

思文閣出版

# 日本の元気印・新島八重

## 新島襄を語る　別巻一

本井康博著
（同志社大学教授）

自分を貫き、身体を張って、信念のままに生きた、八重の人生を話し言葉で紹介。八重の夫・新島襄を中心とした「新島ワールド」のコンシェルジェ（案内人）と自他ともに認め、永年にわたって夫妻の足跡をたどってきた著者でしか書けない、どこよりも濃密な八重入門の決定版。

●内　容●

大河ドラマ「八重の桜」だより
「八重の桜」だより
ＮＹから世界へ
二〇一一年の八重さん
最初の夫・川崎尚之助
「戦いは面白い」
「奸賊どもを夜襲隊で銃撃した女は、妾ひとり」
会津のおんなたち
八重の女子教育
「二十一世紀の勢津子姫」
兄・山本覚馬
八重の七変化
「会津人」への回帰
はじめての八重

【6月刊行】

▼四六判・二四六頁／定価一、九九五円

---

増補改訂

# 新島八重と夫、襄

## 会津・京都・同志社

早川廣中（白虎隊記念館館長・元会津若松市長）
本井康博（同志社大学教授）
共編著

会津藩士の娘として、幕末の会津戦争ではスペンサー銃を手にして戦い、大砲隊を指揮した逸話で知られる新島八重。

維新後は京都に向かい、同志社の創立者新島襄の妻となる。洋装を好み、女子教育や篤志教育に邁進した。

激動の時代を先進的に明るく生き抜いた八重の魅力を、わかりやすく紹介する。

**平成25年（2013）**
**NHK 大河ドラマ**
**「八重の桜」**
**放映決定！**

◇内　容◇


まえがき　―会津人から見た新島八重―　早川廣中
第1部　新島八重・襄と山本覚馬
新島八重・襄・山本覚馬略歴　笠井　尚
会津烈婦新島八重略伝　本井康博
新島襄と八重が暮らした日々と街　本井康博
もうひとりの新島襄　早川廣中
第2部　対談　山本八重子から新島八重へ　本井康博
第3部　新島八重と山本覚馬の資料　本井康博


【5月刊行】

▼四六判・二一二頁／定価一、二六〇円

# 東山歴史逍遥（其四）

中嶋節子

歴史豊かな京都・東山の地への事務所移転にちなんで、気鋭の歴史研究者による東山が舞台の歴史エピソードを、連載でご紹介します（全四回）

## アカマツヲ除外スルコトハ望マシカラズ

京都の原風景ともいうべき東山は、長くアカマツを主体とする明るい林であったとされる。それは里山としての利用と、そのための維持・管理によってもたらされた。洛外図や名所図会にも描かれたアカマツの東山が、その姿を変えはじめたのは近代のことであった。明治初期の林政の混乱、その後の所有と管理、利用の変化によって、昭和初期には人の手が入らなくなった部分からシイの鬱蒼した林へと、徐々に遷移しつつあることが指摘される。山の変化を目の当たりにした人々は、東山が人間の営みの現われとしてあることに改めて気づくとともに、東山にふさわしい姿を模索することを迫られた。

昭和初期は、観光が隆盛するとともに、都市計画の風致地区指定が進められるなど、都市景観に注目が集まった時期であった。こうした時代を背景に、京都の山々のなかでもとりわけ東山は、市街地からの眺めの対象、都市の背景としての役割がより重視されるようになっていた。そこでは京都らしさを担う装置として東山のあり様が議論された。

国有林の扱いを決定する昭和四年の施業計画書では、「アカマツヲ除外スルコトハ望マシカラズ、社寺仏閣ノ屋根尖ツタ塔等ガアカマツノ緑乃至ハ赤イ幹ナドト映リ合フ処ニ京都ノ美ガアルモノト思慮セラル」と、京都の美の観点からアカマツが東山にふさわしい樹種であることを指摘し、アカマツが姿を消した東山は、「風致上何等ノ価値ナキ林分」とする。そして、市街地から眺望できる部分にアカマツを育てることが目標に掲げられた。この時期目指されたのは、かつて利用によってもたらされたアカマツ林を、もっぱら景観要素として計画的、科学的に創造しようとするものであった。

昭和九年の室戸台風の被害や戦争の影響もあって、結局のところ東山がアカマツの林に戻ることはなかった。近代に起こった出来事を含め、自然が生活の投射体としてあることを、いつの時代も東山は身をもって教えてくれているように思われる。

（なかじま・せつこ・京都大学人間・環境学研究科准教授）

てぃーたいむ

# 歴史災害が語る人々の営み

吉越昭久（立命館大学文学部教授）
片平博文（同左）
塚本章宏（立命館大学ポスドク研究員）

## ◎歴史災害とは

**――「歴史災害」とはどのようなものですか？**

**吉越**：過去に起こった災害で、史料あるいは古地図などからある程度復原が可能な災害というように考えています。また、実際に災害が起こっても被害が小さかったり、記録に残らなかったりしたものについては、歴史災害とは捉えないことにしています。

**片平**：特に古代・中世の人々は、どうやって災害が起こるのかとか、いつ頃起こるのかという災害のメカニズムについての知識が、当然乏しかったと思います。実は、今と同じような季節に同じ災害が起こるのですが、そのメカニズムを知らなかっただけでも、その分被害が大きかったのではないかと思います。

**塚本**：この分野については近年、歴史史料のデジタルアーカイブ化が進んだことで、歴史学研究者でなくても、いろいろな人が参加しやすくなってきています。一つの史料を熟読するというやり方以外にも、例えば私はコンピューター上で複数の資料を重ね合わせて、災害情報を統合するＧＩＳ（地理情報システム）の利用に取り組んでいるのですが、さまざまな研究手法が可能になってきています。

研究環境が整ってきたこともあり、歴史災害の研究は注目されてきていると思います。

**――立命館大学歴史都市防災研究センターでは長年、歴史災害に取り組まれてきました。**

**吉越**：もともとは「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」というタイトルで始めた文部科学省の二一世紀ＣＯＥプログラムがはじまりです。その主たる対象地域は、史料が豊富で文化遺産も多い京都でした。本学が京都にあるという事情もありました。研究のスタートは平成一五年からで、期間は五年間でした。一九年からは、継続してグローバルＣＯＥプログラムに採択されまして、それが今年で五年目になりますので、合計一〇年間ほぼ同じテーマで研究をしてきたことになります。

二つのプログラムは、工学系の研究として申請されていました。したがって、工学とか技術の研究者が中心なのですが、文系の研究者も含まれています。その目的は、さまざまな技術を開発したり、防災計画を立てる場合でも、まずその場所における過去の被災履歴を知る必要があると考えたからです。できるだけ過去の災害

をきちんと復原して、そこから防災や減災の知恵を抽出できるのではないかと考えています。文系の研究者は、このような研究を行ってきたのです。

ただ学際研究というのは、分野によって学問的な考え方が全く違いますので、なかなか大変でした。お互いに理解できないところはありましたが、一〇年もやってくるとお互いのことがわかってきまして、最近ようやく本当の学際研究になってきたのではないかと思っています。

## ◎災害を可視化する

**――共同研究の成果に、「京都歴史災害年表」（『歴史災害研究』六、二〇〇六年）がありますね。**

**片平**：この年表は、東京大学史料編纂所の大日本史料総合データベース古記録・古文書フルテキストデータベースなどを手がかりに、我々独自に、時系列で災害データを組み替えたものです。一つ一つの災害をみる研究は、これまでにも多くありましたが、時系列で災害を並べると、また違った結果がみえてくる訳です。

例えば、季節性の災害などははっきりと出てきます。（旧暦の）五月中旬から下旬くらいになると急に水害、台風、旱魃といった災害が起こってきます。それが盛夏の時期にピークを迎えて、一〇月上旬から中旬になって急に少なくなってくるというパターンが明確になってきました。

吉越氏

また、時系列で並べると発生頻度もわかってきます。数百年というスパンで見ていくと、例えば水害のように、特別に災害の多い何十年かがあったと思えば、逆に少ない時期もあります。なぜこの時期に多かったのか、少なかったのか、という論点を提示できるようになります。それは恐らく地形的要因とか気候的要因、あるいは技術的要因とも関連があるでしょう。

それに加えて、この年表の作成によって、京都盆地の中で、災害を時空間的に分析することが可能になったと考えています。

**吉越**：私たちは、一一世紀～一三世紀に起こった火災について、その被災範囲を地図化する作業を行いました。一〇年くらいずつに区切って地図化したのですが、これによって被災地域が時代によって移り変わることを視覚的に把握できるようになりました。

火災が発生したということは、そこに人の営みがあったということですから、都市の移り変わりなどがわかるのです。従来の歴史学の成果に加えて、火災という観点から検証することができる訳で、非常に興味深い成果だと思います。

**――この地図化には先ほどのＧＩＳが力を発する訳ですね。**

**塚本**：そうです。これまで歴史研究ではあまり

使われてこなかったツールだと思います。さまざまな史料から得られた、多くの種類の情報をコンピューター上で集積できるようになりました。

先ほどの平安京の火災をまとめた地図を例にとりますと、一〇〇〇件を越える被災情報を六〇メートル四方の精度で集計しています。こうした詳細な情報をまとめていきますと、時代ごとの特徴が明確にみえてきます。初期に火災が多いのは平安京の北側、特に左京の北側です。そこは貴族の邸宅が多く分布しているところです。それが一一世紀、一二世紀、一三世紀と経っていくにしたがって、今度は規模の大きな火災が南の方で起きるようになってきます。時代と共に活躍する層が、貴族から一般民衆あるいは武家へと変わってきたというのが火災の分布からわかります。

塚本氏

## ◎分析からみえてくる人々の営み

**――災害情報の分析からみえてくる特徴は？**

**吉越**：火災の範囲からみますと、南北に走る西洞院（にしのとういん）大路を境にして西側が非常に少なくなるという特徴があります。たぶん幅の広い通で川があったということが、火災を止めてしまうひとつの要因だったのではないかと思います。これも火災の地図化によって明らかにされた点です。

**片平**：西洞院大路には、その東側に並行する段差、すなわち一種の段丘があって西の方が低くなっていますから、それも火災に影響を及ぼしているかもしれません。

史料にある火災に関する記述は、空間的に非常に明確で、どこからどこまでが焼けたかが、書かれていることが多くあります。その理由はよくわかりませんが、火災によって財産が全部なくなる訳ですから、それだけ深刻な災害だったのでしょう。被災範囲を正確に知ることができるケースは水害などの災害に比べて明らかに多いと思います。

ところで一二・一三世紀の二〇〇年間に起きた京都の火災で、一番被災回数が多い場所はどこで、何回くらい被災していると思いますか？　一番多いのは四条烏丸の近くですが、二〇〇年の間に一六回発生しています。ですから十数年に一回くらいの割合で、被災しています。

**吉越**：今では考えられないことですね。被災しては建て直して、またすぐ燃えてしまうということですから。

**塚本**：当時の人々はすごくたくましいですよね。

**――今日にも通用する「減災の知恵」はありますか？**

**吉越**：火災でいうと土蔵です。土蔵は燃えない構造になっていますし、中にあるものを燃やさないようにしています。屋根や壁の構造だとか、あるいは戸に味噌などを塗って目張りをするとか、

鎮火してもしばらくの間は戸を開けないとか、そういった対応ははまさに有効な知恵です。蔵がいくつか並んだりしているところでは、そこで火災が燃え止まることなどもありました。工夫次第では、今でもかなり通用する知恵だろうと思います。

他に、家訓などを定めて火の用心などの心がけをずっと受け継いでいる家もあります。火を出したくない、大きくしたくないという気持ちは今も昔も同じだろうと思います。火災は初期に消せばボヤで終わってしまいますが、ある程度広がってしまうと後はもうどうしようもなくなってしまう。このことも、今とそう変わりありません。

## ◎『京都の歴史災害』の刊行

**――研究成果の一つとして『京都の歴史災害』を刊行されます。**

**吉越**：私たちとしては歴史災害を復原して、そこから抽出される減災や防災の知恵を提供し、それを都市計画や防災技術に取り込んでもらおうというスタンスで研究してきました。歴史災害を扱っている人の中にはいろいろな分野の方がおられて、私たちの歴史災害の研究グループにも地理学の他に、歴史学の方、地震学の方、活断層を研究している方などがおられます。今回の本ではこれまで一緒に研究をしてきた方に執筆者として加わっていただきました。地域を京都に限定して、水害・火災・地震・土砂災害・気象災害などさまざまな災害についての研究成果を、多くの人に提供することを意識して書いていただきました。

片平氏

**片平**：学際的な成果であることは確かですが、私は専門の地理学からの提言ができたと思っています。いろいろな史料の文字情報を空間的に復原すると、今まで字面を追ってみてもわからなかったことが、ごく簡単に見えてくる場合があるのです。天皇、貴族から庶民にいたるまで、災害によって平等に被害を受けます。したがって当時の社会そのままの痕跡が残るはずなのです。

**吉越**：私たちが被災域という空間情報を提案できれば、歴史学だけでなく、いろいろな分野とコラボしていけるだろうと思います。

それからもう一点、私たちが考えていますのは、歴史都市の文化遺産防災にかかわる教育プログラムを作っていくということです。実は、教育研究拠点を作るというのがＣＯＥプログラムのもともとの狙いなのです。このため、大学院の再編などを検討しておりまして、本書がそこでの教育や研究に役立つことを願っています。

（二〇一二年六月一九日　於：立命館大学歴史都市防災研究センター）

エッセイ

# 阿蘇下野狩から草原の歴史を読む

飯沼賢司

下野狩は、源頼朝が富士野で巻狩を行った際に、手本にした有名な狩神事である。阿蘇五岳の西側の山麓の下野という草地を舞台とする神事で、春二月の卯の日に阿蘇北宮の鯰に贄の鹿を捧げるために行われる狩神事であった。

南郷・矢部方面から来た大宮司と阿蘇谷の下宮から来た阿蘇権大宮司が鬢掻の馬場の入口で合流し狩が始まる。狩は南郷谷の下田権大宮司が狩奉行として取り仕切り、下野にある鬢掻の馬場、中の馬場、赤水の馬場の三か所の馬場に順番に鹿・猪、小物などの獣が集められ、大宮司以下、数百騎の阿蘇一族、阿蘇領の騎馬武者が出て馬上から獲物を射た。

この狩では、阿蘇領から三〇〇〇人以上の勢子・狩人が動員された。その際、草地に火を入れて獲物を追いたて馬場に集めた。阿蘇下野狩はその草原の景観を維持してきた野焼きと結びつく神事であり、阿蘇の春を告げる阿蘇神社で最も重要な神事で、これを怠ると阿蘇大宮司家に大変なことが起こるといわれてきた。

この神事は、民俗学者の柳田国男も注目した狩神事であったが、すでに天正六年（一五七八）を最後に廃絶し、阿蘇大宮司家はその復興を目指し、熊本藩と交渉したが、終に復興することはできなかった。われわれは、これまでは、近世に編纂された『下野狩集説秘録』（阿蘇家所蔵）という史料でしかこの神事の内容を知ることができなかった。しかし、この記録は、廃仏の傾向を強めた幕末の阿蘇惟馨かその子惟治が大宮司のときに編集されたもので、残念ながら、中世の神仏習合段階の神事であった下野狩の実像を伝えるものではなかった。

今度刊行した『阿蘇下野狩史料集』では、いずれも永青文庫所蔵で中世末の延徳三年（一四九一）に作成された『下野狩日記上巻』と、年号はないがほぼ同時に作成されたと推定できる『下野狩日記　下巻』の全文、中世の下野狩の記録を多く所収した『下野狩旧記抜書』全文を翻刻し所収した。さらに阿蘇家が所蔵する下野狩に関する諸記録も併せて所載した。これによって、中世の下野狩神事の全貌が解明できるようになった。

『阿蘇下野狩史料集』に所載する史料によれば、平安時代中期には、その神事の原型が出来上がり、南北朝期の大宮司阿蘇惟時が、領内の古老や代官・役人からそれまでの神事の諸情報を集め、

狩神事の記録を作成したことがわかる。これが一五世紀末に『下野狩日記』上下として整理され、慶長一二年（一六〇七）に書写されたのが永青文庫本の原本である。さらに、この『下野狩日記』とともに阿蘇家にあった下野狩の関係史料を抜書したのが『下野狩旧記抜書』である。

中世の下野狩は、神仏習合の神事であるが、多くの動物を殺生する狩神事であった。これは、殺生禁断を旨とする仏教の論理には真っ向から違反する行事であるため、その行事を正当化する「方便の殺生」という論理が展開されている。

すなわち鹿などの畜生には、人間がもつ三毒（貪欲・瞋恚・愚痴）などの煩悩が宿り、これを殺すことでその煩悩が昇華される。鹿は神仏が方便として現世に送った三毒の代表的存在であり、その殺生に立ち会った人たちも妄念・悪念が鹿に乗り移り成仏できる。また、自ら望んで成仏しようとし狩倉に集まり殺された鹿は、「生き返らん時」は必ず阿蘇社の神官に生まれるとも説く。さらに、狩のために放たれる野焼きの火は、人間の三つの障り三毒の煩悩を焼く火であるとしている。この火によって煩悩が焼かれ、その利益で成仏を遂げることを「三物替」と説明する。中世に行われた「焼狩り」という狩は、殺生を禁断する仏教においては、魚を毒で殺す流毒の法とともに、もっとも大量に獲物を殺戮する狩猟法として、鎌倉期の禁令にしばしば現れる。

阿蘇では、このような殺生の象徴的な狩を「方便の殺生」という論理で祭礼化し、あの広大な草原を維持する「野焼き」と結びつけ阿蘇最大の祭礼とした。

この焼狩りと結びついた野焼きは、われわれが、この六年あまり総合地球環境学研究所のプロジェクト研究で進めてきた阿蘇・くじゅうの草原の調査の成果により、すでに縄文時代の早期、一万年以上前から開始された狩の形態であったことが明らかにされた。阿蘇は千年の草原といわれてきたが、一万年の歴史をもつ草原だったのである。下野の狩は、阿蘇の田畠地相定まれる以前の祭礼とされ、その一万年前からの歴史が織り込まれていたといえよう。

一方、下野狩に続く春の神事、田作神事（俗に火振り神事）も下野と密接に関係し、今日まで続けられている。田作神事で阿蘇の年禰神と結婚し、五穀を産み出す姫神は下野の内にある鷹山子安川から迎えられた。下野は、阿蘇の上宮の西山麓に広がる原「阿蘇社」の境内地ともいえる空間であり、この中にある森を「鷹山」と呼び、狩神事が行われる場を「馬場」と呼んだ。阿蘇の祭礼はすべてが下野につながり、下野狩神事にはその阿蘇一万年の歴史が集約されている。

阿蘇の人々はどのように草原を生みだし、草原を利用し、さらに田畠を営んできたのか。阿蘇の神事の解明は、日本列島一万年の歴史の解明につながるともいえるのではなかろうか。

（別府大学文学部教授）

エッセイ

# 県庁へ行こう！

田中智子（たなかともこ）

旧制高校が設置された際の、いわゆる「誘致」に関わる史料収集のため、このところ、地方都市巡りに精を出している。飛行機からの地勢鳥瞰は、何度経験しても胸踊るし、鉄道の旅も捨てがたい。現地に着いたら、徒歩と市電がおすすめだ。

調査のお目当ては、なんといっても「県庁」。「県立図書館」や旧制高校「後身校」がそれに続く。ところが、この三つが中心部に揃って所在する県はめずらしい。いずれか、場合によってはすべてが郊外移転していることすらある。

中心部に残る県庁であるなら、城跡との位置関係が気になる。たとえば静岡県では、隣接どころか、庁舎が石垣の内側にあって驚いた。いきなりタイムスリップし、登城気分になる。軍事機能こそ持たないが、行政府という点では、県庁と城は同じだとあらためて気づく。愛知県庁にいたっては、立派な近代建築である本体が、緑青色の天守閣もどきの冠を載いており、度肝を抜かれる。究極の形態、県庁自体が城と化している。壮麗な議事堂、レトロ感あふれる各課表札や「電話室」等々も合わせ、見どころ満載の（暑苦しい）庁舎である。

東日本の震災以前から、各県庁では節電が心がけられていた。明かりを落としたバブル期の庁舎は、がらんとさびしい。一訪問者としてエレベーター自粛に協力、というより、かいまみえる仕事場事情が興味深いので、なるべく階段を使う。高層庁舎の最上階にはきまって展望室があり、時にはしゃれたレストランも併設される。だが、立ち寄る人はそれほどいない。閉店も目にする。やはり県庁は、速やかに用事を済ませる場所であり、遊び目的の人寄せは難しいのだろう。それでも、四方の景色を見渡すひとときははずせない。たとえば千葉県庁では、ずらりと並んだ歴代知事の肖像・事績を背に、眺望が楽しめる。

はてさて、本来の訪庁目的は、「議会図書室」の利用である。地方自治法第百条にて設置が義務付けられた議員用の施設だが、県レベルならほぼ一般市民にも開放されている。県庁は相対的に女性率の高い職場だと感じるが、非正規雇用と想像される女性職員が一～二名配置されているのが議会図書室の平均像だ。議員の応接室・コピー室を兼ね、「男の職場のお世話役」と位置づけられてきたことにもよるのだろう。年齢さまざまな彼女たちの日常や

人生を想像し、自身の来し方行く末にも思いをはせると、つい仕事の手がとまってしまう。

広さや蔵書などを一通りチェックした後、目的の史料の所在や利用条件を尋ねる。一般市民はそうそう来ないだろうし、私の相談事も特殊である。不愉快な経験は皆無、とは言わないが、総じて応対は悪くない。たらい回しや五月雨式を経験したとしても、結果的に目的の史料はほぼ入手してきた。たしかに、専門司書を置き、公開態勢を整えることは理想であろう。だが、マニュアルにない状況、私のようにみすぼらしい不詳・不意の来客に末端職員がどう対応するか。そこにこそ、その県庁の底力をみるのだ（有川浩センセイの『県庁おもてなし課』でも、有能で魅力的なアルバイトのヒロインが活躍するのだった）。だから議会図書室はやみつきになる。まずは「人」である。

男性職員諸氏の印象に気おされた愛媛県では、『坊ちゃん』を再読したくてたまらなくなった。おりしも町は「坂の上の雲」一色だったが、風俗人情を味わうには、やはり漱石センセイだ。しかし松山駅に見当たらず、帰路のお友は、「坊ちゃん団子」に終わる。いずこのキヨスクも、まずは「ご当地小説」を備えおかれたし。

県庁は単なる建造物ではなく、生きた「空間」であり、「街」でもある。一階に地方銀行・郵便局、ピロティでは管下市町村の産直販売や展示なども行われる。北海道や島根では領土問題がアピールされていた。地階には売店。宝飾品コーナーは定番であるが、某県の布団特売はどうしたわけだろう。

そして食堂である。最上階レストランもいいが、あえて下層階の職員用食堂に入る。味・盛り付け・価格等の比較採点のため、当初は意地でもカレーライス、と決めていた。ところが長崎で、うっかりチャンポンを注文してしまい、以来「ご当地メニュー」も可、とルール変更した。北海道庁食堂でお目にかかったのは、エゾシカ・ハンバーグ。初日は味噌ラーメンを選び、翌日のお楽しみに残しておいたのが失敗で、結局ありつけなかった。人気ランチだったらしい。肩を落として階段を上がると、「環境局エゾシカ対策室」を発見、食肉化の背景を理解する。

県庁所在地といえども、目抜き通りがシャッター街化し、「ゴールド&ピンク」（サラ金と性産業）の看板ばかりが目立ったら危険信号だ。地方都市の疲弊は傍目にもわかる。一方で、庁内の福利厚生の充実ぶりは、公務員バッシングの波にさらされるのだろう。

そんな時代だからこそ、県庁が愛おしい。桂望実センセイの向こうを張り、いつの日か『県庁のメシ☆』©を上梓、マンガ部門のベストセラー化を果たし（!?）、応援団として一役買うことを夢見ている。

（同志社大学人文科学研究所助教）

# 裏側からみた日本——サン・パウロで日本を論じる——

稲賀繁美

サン・パウロ大学の日本研究所で博士課程の授業を受け持ってから、はやくも四年が経過した。地下一階、地上三階の鉄筋コンクリートの研究所は、南米随一の日本語図書館を誇る。創設者は、日系一世として少年期に一家とともに入植した鈴木悌一。第二次世界大戦で連合国側についたブラジルは日本人移民の資産を凍結したが、日本敗戦後のその資産凍結解除に奔走した若き弁護士である。つづいては日本人移民悉皆調査という大事業を成し遂げている。この遍歴を見ただけでも、日本列島に留まれば発揮できなかったかもしれない才能が、新大陸で縦横に開花した有様が目に浮かぶ。人類学者としてアンデス研究に成果をあげた泉靖一とは莫逆の友となったが、鈴木がサン・パウロ、泉が韓半島の京城で、いわば植民地入植者の子弟としての少年期を送っている共通点も、見逃せまい。七〇歳を過ぎた悌一は、高齢競泳記録保持者となり、晩年に手を染めた油彩画でも評価を得、デッサン教室ではモデルの北アフリカ出身の女性と、フランス語でヴェルレーヌの詩を暗誦しあった、といった艶のある逸話にも事欠かない。

そうした日系移民紳士録の個別例を、移民教育史などの社会学的研究の地図のうえにマッピングしてゆくだけでも、二五〇万人程度のエスニック集団の歴史的・地域的推移が、手に取るように摑めてくる。日本列島以外で世界最大の日本人社会を研究することそのものが、日本研究のひとつの課題となるだろう。日本社会論を日本列島に限定するのは不利だ。それが門外漢ながら筆者の持論である。外部社会へと浸透し共存を強いられるなかで、いかなる変容を辿ったかの経緯に、日本社会の特色が析出するはずだ。

サン・パウロ大学で授業の相手となってくれた院生たちのうち何人かは、建築学科の院生で、すでに近辺の建築事務所での仕事も手伝っていた。日本語会話は流暢なのだが、それならと思って邦字新聞を読む授業を試みたところで、意外な障害が発覚した。口語日常会話には不自由しないかれらが、漢字やカナの読み書きにはまったく対応できないからだ。思えば、三〇年代半ばのブラジル移民の生態を描いた石川達三の小説『蒼氓』が、折からの公式移民百周年もあってブラジル語に訳されている。だがこれは、一時は移民蔑視と批判された小説が復権を果たしたというだけのことではない。いまや移民三世、四世たちはブラジル語訳がなく

ては、自分たちの先祖の事跡を綴ったこの古典を読み解くこともままならないのだ。

これらの日系院生たちには、ずいぶんいろいろなことを教えられた。地球の裏側で、ヒロシマの原爆に取材した『はだしのゲン』について議論をするとは思ってもいなかったし、ソフィア・コッポラのLost in Translationがブラジル人のかれらにとって、日本を知るひとつの通路となっているのも、新鮮な発見だった。ロラン・バルトの『表徴の帝国』がインテリたちの日本理解の魔法の鍵となっており、言語的な親近性から、今なおフランス語が知識人社会のステイタス・シンボルとして何がしかの役割を担っている。折から文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースは百歳を祝おうとしていたが、『悲しき熱帯』がなぜブラジルのアマゾン河流域を舞台とするのかも、こうした文化史的な背景を踏まえないと理解できまい。

筆者の周辺にいる細川周平は『サンバの国に演歌は流れる―音楽にみる日系ブラジル移民史』（中公新書、一九九五年）、『シネマ屋、ブラジルを行く―日系移民の郷愁とアイデンティティ』（新潮選書、一九九九年）さらには『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』（みすず書房、二〇〇八年）によって読売文学賞を受賞している。相前後してブラジルに滞在した今福龍太もレヴィ＝ストロースとの共著といってもよい『サンパウロへのサウダージ』（みすず書房、二〇〇八年）のほか、『Longe do Brasil 1935-2000　ブラジルから遠く離れて 1935-2000』（サウダージ・ブックス共編著／港の人、二〇〇九年）をも世に問うている。井上章一には『ハゲとビキニとサンバの国―ブラジル邪推紀行』（新潮新書、二〇一〇年）がある。いずれも狭義の日本研究という範疇には収まるまいが、地球の対蹠地に立った日本観察の書物といえるだろう。ブラジルでキョウトとは殺虫剤メーカーの名称として著名、ということひとつ、日本では知られていない。

フランス東部、コルマール郊外にはアルザス日本研究所がある。そこで精力的に活動しているジルー・ムラカミ教授は、実はサン・パウロ大学日本研究所の博士課程修了生。ストラスブール大学でしばらく教鞭をとっておられた言語学者で、ロドリゲスの日本文法典を専門とする鈴木タエ先生も同窓で、実は彼女は鈴木悌一のご令嬢であった。ブラジル・フランスそして日本を縦横に活躍できる人材は、日本ではほぼ育成できない。海外日本人社会には、将来の日本語社会を外に開く貴重な潜在力が宿っている。

ワシントンＤＣでは二〇〇六年にEncompassing the Globeと題する展覧会がサックラー博物館で開催された。ポルトガルの交易上の世界制覇を回顧する催しだったが、そこにはアフリカから南アメリカ、さらにはインドのゴアを経由してマカオから中国や日本へと貿易路を拡張した大航海時代の航跡が縦横にたどられた。世界史を構築した一方の覇者がポルトガル人だった。そうした世界大の視野のなかに、日本の参与をあらためて位置づけてみるところから、日本研究の視野を拡大することも、将来の課題だろう。

（国際日本文化研究センター教授）

史料探訪 ㊾

# 鼠草子絵巻

池田芙美
（サントリー美術館　学芸員）

サントリー美術館は一九六一年（昭和三六）、東京・丸の内に開館した。一九七五年（昭和五〇）には赤坂見附に移転、そして二〇〇七年（平成一九）、六本木の東京ミッドタウンで新たなスタートを切った。開館五〇年目を迎えた昨年は、美術館の活動を振り返る大きな区切りとなった。次の五〇年へと向けて歩みだした本年は、六本木での活動が五年目を迎える節目の年でもある。

五一年前の美術館創設は、サントリーの創業六〇周年を記念して発案された文化事業の一環であった。「祖先の生んだ美しい生活文化の心を大切にすることを願い、日本の古美術を中心に現代的な視点からとらえた企画展を開催したい」という初代館長・佐治敬三の発想が創設の出発点となっている。ただし、他の多くの私立美術館が個人コレクターの見識によるコレクションを所蔵・展示しているのとは対照的に、サントリー美術館は設立当初、コレクションがゼロの状態であった。そこで、コレクションの充実を図りながら、同時に展覧会の開催を重ねていくという独特な活動スタイルが生まれることになる。「このことが結果的に後発の美術館でありながら、当時としては新しい感覚の美術館としてアイデンティティをいち早く確立することに結びついたのは幸運なことであった」と後に佐治敬三は語っている。

収集と企画のコンセプトは「生活の中の美」。すなわち、日本人の生活を彩ってきた美の遺産に焦点を当てることとされた。コンスタントに増え続けたコレクションは現在、約三〇〇〇件にのぼり、その内容も絵画・漆工・陶磁・金工・染織・ガラスと多岐にわたる。また、展覧会ではテーマの多様性と切り口の斬新さに重点が置かれ、開館以来、開催した企画展は三四〇回以上を数える。常設展示室を持たない当館にとって、ユニークな自主企画による展覧会の数々こそが「サントリー美術館らしさ」を形作ってきたといえよう。

とくに絵画コレクションについては、〈屏風〉と〈お伽草子〉の収蔵品の多さが特徴である。部屋の間仕切りや風よけなど、生活の調度品としても使われた〈屏風〉、また、人々の暮らしの中で親しまれた〈お伽草子〉は、まさに「生活の中の美」というコンセプトにふさわしい。

〈お伽草子〉とは、室町時代から江戸時代初期にかけて作られ

「鼠草子絵巻」（巻二 部分／サントリー美術館蔵）

た短編小説で、内容は公家・僧侶・武家・庶民・擬人化した動物に関するものなど、多様な題材を含んでいる。なお、狭義には江戸時代中期に大坂の渋川清右衛門が「御伽文庫」として刊行した読物を指す。

当館の〈お伽草子〉の中で最も人気があるのが、挿図に挙げた「鼠草子絵巻」である。「鼠草子」は鼠（男）と人間の女との異種婚譚で、主人公が鼠であるという題材の親しみやすさや、ユーモア溢れるその内容から大いに流行した。当館以外にも、東京国立博物館、天理図書館、ニューヨーク公立図書館スペンサー・コレクションなど、複数の類品が残されている。

絵巻の内容は次の通りである。主人公・鼠の権頭は、小さな畜生に生まれたことを残念に思い、人間の女と契りを結び、子孫の代には畜生道から逃れたいと願う。家来の左近尉に相談すると、近くの柳屋にちょうどふさわしい美しい娘が住んでおり、清水観音に祈ったならば願いが叶うでしょう、という。そのアドバイスを受けて、権頭は急ぎ清水へ参詣する。観音は権頭を哀れみ、夢に現れ、音羽の瀧のほとりにいる娘を妻として与える、とお告げを下す。あくる日、権頭が音羽の滝に行くと、柳屋の娘ら参詣の女性たちがおり、お告げの話をすると、姫君は夫婦となることを了承する。

権頭は姫君と結婚し、幸せな日々を送っていたが、ある日、清水にお礼参りをするため家を留守にすることになり、事態は一変する。姫君は侍従に、近頃この家の様子は尋常ではありません、

もしかすると魔性のものに誘われて、畜生道にでも落ちたのではないかと情けなく思います、障子の隙間から下々の様子をのぞいてみましょう、と持ちかける。家の者たちが物の隙間や土塀の崩れ目を通って行き来をしているのを目にし、姫君は自分が畜生道に落ちたことを悟る。そして、琴の糸を結んで仕掛けておいた罠に、運悪く権頭がかかり、家来の左近尉が罠を噛み切って助けた様子を目撃し、姫君は取るものも取らずに家を出、出家をしようと心に決める。

権頭は姫君を失った悲しみで、毎日涙にむせんでいたが、姫君が出家の志をひるがえし、都の人と結ばれ、今では昔のことをあさましく思って、鼠取りの名人・猫の坊を飼っていることを知る。ショックを受けた権頭は、剃髪出家し、ねん阿弥と名乗る。

仏道修行のため、高野山に上っていたねん阿弥は、道中で猫の坊に出会い、驚いてひれ伏す。しかし猫の坊は、自分も妻と別れ仏道に入ったので、昔の悪い考えは少しもない、安心して共に仏果を願おうと言う。そこで猫も鼠も連れ立って、高野山に入った、というのが大筋である。

〈お伽草子〉に焦点を当てた展覧会としては、一九七九年（昭和五四）に当館で行われた「おとぎ草子・奈良絵本――特別展示・海外所蔵本――」が早い例として挙げられる。この展覧会は日本中世絵入本文学の国際シンポジウムに合わせて企画されたもので、学術的にも高い評価を受けた。「鼠草子絵巻」は、コレクションの充実と、斬新な企画展という二つの柱を掲げてきた当館ならではの所蔵品といえる。

そして、この「鼠草子絵巻」が登場する「お伽草子――この国は物語にあふれている（仮称）」展が本年九月一九日（水）から一一月四日（日）に開催される予定である。当館としては一九七九年以来、実に約三〇年ぶりのお伽草子展となる。絵巻の優品を中心に、その素朴でユーモラスな魅力に迫る内容になっている。

ぜひ皆様にご高覧いただければ幸いです。

## サントリー美術館

港区赤坂9-7-4　東京ミッドタウン ガーデンサイド
Tel. 03-3479-8600
ホームページ　http://www.suntory.co.jp/sma/
都営地下鉄「六本木」　東京メトロ「六本木」「乃木坂」

— MEMO —

**【開催予定】　8月8日(水)～9月2日(日)**
「来て、見て、感じて、驚いちゃって！
おもしろびじゅつワンダーランド」
・料　金　一般1000円　大学・高校生800円
中学生以下無料
・休　館　日　会期中無休
・開館時間　午前10時～午後6時
（金・土、8月12日(日)は午前10時～午後8時）

**【開催予定】　9月19日(水)～11月4日(日)**
「お伽草子――この国は物語にあふれている（仮称）」

## 書評・紹介一覧　3～5月掲載分

※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕

**京の医史跡探訪（増補版）**
（紹）『鍼灸Osaka はりきゅうロード』別冊ムックVol.2

**日本産業技術史事典**
（評）『化学史研究』第39巻1号（梶雅範）

**後鳥羽院政の展開と儀礼**
（評）『古代文化』第63巻4号（岩田慎平）

**高句麗壁画古墳と東アジア**
（紹）『古代文化』第63巻4号（篠原啓方）

**日本文学の「女性性」**
（評）『比較文学』第54巻（橋本雅子）

**日本古代典籍史料の研究**
（評）『日本歴史』第767号（吉川聡）

**仁明朝史の研究**
（紹）『史学雑誌』第121編3号（吉永匡史）

**戦国大名武田氏の権力構造**
（評）『史学雑誌』第121編4号（津野倫明）

**戦国期権力佐竹氏の研究**
（評）『日本歴史』第768号（今泉徹）

**中近世農業史の再解釈**
（評）『日本歴史』第768号（永井義瑩）

**一六世紀イングランド農村の資本主義発展構造**
（評）『西洋史学』第244号（高橋基康）

**京都療病院お雇い医師ショイベ**
（紹）「日医ニュース」5/5

**近代医療のあけぼの**
（紹）「日医ニュース」3/5

**一八世紀日本の文化状況と国際環境**
（評）『洋学史研究』第29号（塚越俊志）

**田能村竹田基本画譜**
（評）『美術フォーラム』第25号（橋爪節也）

**歴史のなかの源氏物語**
（紹）『日本歴史』第768号

**仏教と平和**
（紹）『寺門興隆』第161号
（紹）「佛教タイムス」5/24

**動物・植物写真と日本近代絵画**
（紹）『月刊美術』第439号
（紹）福田平八郎と日本画モダン 関連サイト（山種美術館）

**近代日本における書への眼差し**
（紹）『墨』第215号
（紹）「大東文化」4/21
（紹）『書道界』第270号

**翻訳文学の視界**
（紹）「読売新聞」（夕刊）4/3

**近代数寄者のネットワーク**
（紹）『淡交』第816号

**近代日本高等教育体制の黎明**
（紹）「同志社タイムス」4/15

**室町水墨画と五山文学**
（紹）「中外日報」4/21
（紹）『月刊美術』第441号

**―茶会記をひもとく―逸翁と茶会**
（紹）「茶華道ニュース」4/15

**森田りえ子作品集**
（紹）『月刊美術』第439号
（紹）『アートコレクター』第37号
（記）「読売新聞」（朝刊）4/15
（紹）『ギャラリー』第325号
（紹）「新美術新聞」5/21
（紹）『美しいキモノ』第240号

**緒方惟準伝**
（記）「産経新聞」（朝刊）5/21（中田雅博）

## 3月から5月にかけて刊行した図書

| 図　書　名 | 著　者　名 | ISBN978-4-7842 | 定価 | 発行月 |
|---|---|---|---|---|
| **岡倉天心の比較文化史的研究** | 清水恵美子著 | 1605-5 C3070 | 11,235 | 3 |
| **室町水墨画と五山文学** | 城市真理子著 | 1607-9 C3070 | 6,300 | 3 |
| **近代日本高等教育体制の黎明** | 田中智子著 | 1618-5 C3021 | 7,350 | 3 |
| **松岡恕庵本草学の研究** | 太田由佳著 | 1617-8 C3021 | 7,875 | 3 |
| **軍事技術者のイタリア・ルネサンス** | 白幡俊輔著 | 1625-3 C3022 | 5,880 | 3 |
| **風俗絵画の文化学Ⅱ** | 松本郁代・出光佐千子・彬子女王編 | 1615-4 C3070 | 7,350 | 3 |
| **森田りえ子作品集** | 森田りえ子著 | 1596-6 C0071 | 25,200 | 4 |
| **―茶会記をひもとく―　逸翁と茶会** | 逸翁美術館編 | 1626-0 C1076 | 1,050 | 4 |
| **近世史小論集** | 藤井譲治著 | 1621-5 C3021 | 6,300 | 4 |
| **着衣する身体と女性の周縁化** | 武田佐知子編 | 1616-1 C3039 | 6,090 | 4 |
| **緒方惟準伝** | 中山沃著 | 1563-8 C3023 | 15,750 | 4 |
| **日本中世政治文化論の射程** | 山本隆志編 | 1620-8 C3021 | 8,190 | 5 |
| **平安貴族社会の秩序と昇進** | 佐古愛己著 | 1602-4 C3021 | 8,190 | 5 |
| **祇園祭の中世** | 河内将芳著 | 1631-4 C3021 | 4,725 | 5 |

## 3月から5月にかけて刊行した継続図書

| シ リ ー ズ 名 | 配本回数 | 巻数 | 巻タイトル | ISBN978-4-7842 | 定価 | 発行月 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **禁裏・公家文庫研究** | 4 | 4 | | 1614-7 C3324 | 9,660 | 3 |
| **顕岑院本** | 1 | 1 | 藤村庸軒流茶書 | 1624-6 C3076 | 11,025 | 4 |
| **増補・改訂　西村茂樹全集** | 11 | 8 | 記述書4 | 1629-1 C3312 | 18,900 | 4 |
| **金鰍叢書** | 38 | 38 | | 1630-7 C3370 | 9,975 | 5 |
| **徳川美術館論集　尾陽** | 8 | 8 | | 1633-8 C1370 | 3,150 | 5 |
| **花園院宸記** | 21 | 30 | | 1632-1 C3321 | 399,000 | 5 |
| **技術と文明** | 32 | 32 | 17巻1号 | 1635-2 C3340 | 2,100 | 5 |

（表示価格は税5％込）

## 営業部より

▼先日、長野県の川中島古戦場に行きました。小学生の時に、大河ドラマ「武田信玄」に魅了され、歴史好きになった身としては感無量。並立する長野市立博物館では「ものがたり「川中島の戦い」」という展示を開催しており、川中島の戦いが後世ではどのように描かれていくかを見ることができ、大変興味深いものでした。歴史学のなかでも、正しい歴史とは何か?と議論となりますが、その時代時代でどのように考えられていたかへのアプローチも大事だと改めて考えました。（I）

**☆フェア情報**

ジュンク堂書店仙台本店（宮城県仙台市）
歴懇フェア二〇一二年夏
「戦争は他人事ですか?
―近現代戦を知る―」　8月31日まで

**☆思文閣出版のフェイスブックページをご覧下さい。**

刊行図書や著者・学界・業界周辺の話題を日々更新していきます。ぜひお訪ね下さい。
http://www.facebook.com/shibunkakupublishing

## 編集後記

▼収録当日は台風四号が関西に上陸。激しい暴風雨が吹き荒れる歴史災害を語るにふさわしい（?）天候でした。台風や洪水のみならず、火災・地震など多くの災害に見舞われてきた京都。先人たちの防災・減災の知恵と努力に学ぶところがきっとあるはずです。（M）

▼京の七月は祇園祭。今年の宵山は三連休とあってさぞかし賑わうだろう。祭フリークの私は、喫茶店で待ち合わせて神輿が通るのを待つこともある。沿道に立つ街の人たちの、歴史的に連綿と変わらないであろう、祭を楽しむ表情を、毎年楽しんでいる。（大）

▼傘を差して出たのに、それを店に忘れ雨に濡れて帰ってくる。また出かけようとして、ようやくそのことに気付く…。ここまで来たら開き直るしかない。口ずさむのはこんな曲"I was so much older then, I'm younger than that now"–Bob Dylan/My Back Pages–（h）

▼ジュンク堂書店新宿店さんが閉店されました。弊社書籍の年間一五〇冊の売上は無くなるのか、相応の売上増が他にまわるのか、判断の難しいところです。なにより目下の痛手は、店頭在庫の多量の返品が…。（江）

▼表紙図版：浅井忠図案・杉林古香 朝顔蒔絵手箱（京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵）／『京都　伝統工芸の近代』より


**鴨東通信**（おうとうつうしん）　四季報 No.86

2012（平成24）年7月20日発行

発　　行　株式会社 **思文閣出版**

〒605-0089
京都市東山区元町355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所


**■定期購読のご案内■**

『鴨東通信』は年4回（3・6・9・12月）刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

# 森田りえ子作品集

Art Works of MORITA Rieko

1979－2011

粧　2002

今、最も注目されている日本画家の、初期作品から最新作までを集大成した待望の作品集。

**平成24年4月刊行**

著　者　森田りえ子
判　型　A４判変型（297×225mm）
　　上製本・函入・DVD付
総　頁　３５６頁
**定　価　２５,２００円**（税５％込）
ISBN978-4-7842-1596-6 C0071

# 世界を巡る美術探検

【7月刊行】

**木村重信著**

和・漢・洋中心の美術史に一貫して異を唱え、民族芸術学を提唱してきた著者が、北極・南極・シベリアを除く、世界のほぼ全域で行ったフィールドワークのルポルタージュ。35の地点や地域をとりあげる。あるときは芸術性が、あるときは宗教性が、またあるときは旅そのものがメインになるように切り口を変えて綴る、世界美術への招待。

**【内容】**

Ⅰ **ヨーロッパ**　氷河時代のテラコッタ製女性像／死を象徴する巨石モニュメント／立体派的なヌラーゲ青銅彫刻／古典的半裸体の擬古作／古代ゴーロワ彫刻の復活／ハンザ同盟時代の美しい街並み　ほか

Ⅱ **アジア**　歴史を覆す王像（？）の発見／イシュタル門、空中庭園、バベルの塔／ヒンドゥー教の男女両性具有神／故宮博物館名品の特別展示／「祇園精舎」と考えられた寺院（ワット）　ほか

Ⅲ **アフリカ**　優美、端正なクレオパトラ浮彫像／プレスター・ジョンの国／ムザブの谷にひろがるキュビズム風建築／華美、幻想的なンデベレ壁画／華麗な衣服を着る、オシャレなヘレロ人　ほか

Ⅳ **オセアニア**　J・A・ミッチェナー『南太平洋物語』の舞台／温泉地に渦巻くマオリ模様／アボリジニの木彫と樹皮画　ほか

Ⅴ **アメリカ**　不思議な地上絵とユニークな工芸／南北アメリカ最大の古代都市／日干煉瓦（アドベ）の多層アパート式住居群／北西海岸先住民美術の過去と現在／フランス風のジャズ発祥地　ほか

**きむらしげのぶ**…京都市立芸術大学教授、大阪大学教授、国立国際美術館館長、兵庫県立近代美術館館長、兵庫県立美術館館長など歴任。文学博士。毎日出版文化賞、大阪文化賞、勲三等旭日中綬章、京都市文化功労賞、兵庫県文化賞など受賞。著書多数。

▼A5判・三〇八頁／**定価二、五二〇円**

# 木村重信著作集

**［全8巻］**

原始美術から現代美術までの広範な業績のなかから再編成された著者自選の著作集

**①美術の始源　②はじめにイメージありき　③美術探検　④民族芸術学　⑤世界美術史　⑥現代美術論　⑦美術評論　⑧生活文化論**

**①定価八、九二五円　②～⑧各定価九、九七五円　揃定価七八、七五〇円**

# 着衣する身体と女性の周縁化

【4月刊行】

**武田佐知子編**

着衣という共通の素材を通して、さまざまな社会におけるジェンダーのあり方を考察。グローバルな視点から、衣服と身体の表象について解き明かす26篇。

▼A5判・五〇〇頁／**定価六、〇九〇円**

# 布がつくる社会関係

**金谷美和著**　**インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌**

布を視点に社会を分析することで文化人類学的研究の新たな可能性を拓く。

▼A5判・三三〇頁／**定価六、五一〇円**

# 北太平洋の先住民交易と工芸

**大塚和義編**

交易ルートの実態を明かし、先住民の生活と産業を豊富なカラー図版で紹介。

▼A4判・一五〇頁／**定価二、九四〇円**

# 東アジアの交流と地域展開

**北東アジア交流研究プロジェクト**
**藤井一二編**

【7月刊行】

経済・文化等の視点から、北東アジアの「交流の多様性」を明かし、「アジア地域交流学」の構築を目指す研究プロジェクトの成果。第2冊目にあたる本書は論文14篇を収録。

**【内容】**

**Ⅰ部　東アジアの交流と文化**　中国発見の日本《和同開珎》銭と国際交流（藤井一二）日本・中国における史前文化交流の可能性と軌跡（王秀文 大連民族学院）抗日戦争・国共内線～朝鮮戦争期の中国東北における朝鮮人軍部隊（滝沢秀樹 大阪商業大学）20世紀前半、旧満州における日本人ジャーナリスト（劉愛君 大連工業大学）日本における飛鳥、白鳳、天平時代の女性の服装と敦煌との比較研究（盧秀文 敦煌研究院）敦煌莫高窟早期における三窟に関して（蔡偉堂 敦煌研究院）

**Ⅱ部　東アジアの交流と経済**　韓国の経済・経営の進展と韓国日系企業の事業展開（服部治 松蔭大学）韓中経済交流と中国進出韓国企業の経営活動（黄八洙）韓国の経済成長とその源泉について（木村正信 金沢星陵大学）アジア経済における貿易・投資の変化と日本の対応（茂木創 柘植大学）北東アジアの経済統合にみる政治経済的課題（川島哲 金沢星陵大学）日中間環境技術移転の市場原理によるパターン（龍世祥 富山大学）日本商業政策的分析［中国語］（方斌 金沢星陵大学）

▼B5判・二四〇頁／**定価五、〇四〇円**

# 東アジアの交流と地域諸相

**金沢星稜大学ORC北東アジア交流研究プロジェクト編**

本書は、二〇〇五年に敦煌研究院の2氏を迎えて開かれた「アジア文化交流と世界遺産を語る」フォーラムの成果である11篇を収録。

▼B5判・一七〇頁／**定価三、三六〇円**

# 軍事技術者のイタリア・ルネサンス

**築城・大砲・理想都市**

**白幡俊輔著**

【4月刊行】

軍事技術という観点から、ルネサンス期イタリアにおける戦争と社会の関係を考察。具体的には、一五～一六世紀イタリアの築城術の「理想都市」「軍事的機能」という二つの要素に着目し、その変容過程を、建築家の残した著作や活動・軍事思想からの解明で試みる。

**【内容】**

**第1章　ルネサンス期イタリアの戦争・武器・傭兵**　15世紀までのイタリアの軍隊と戦術／火器と築城術の特徴／15世紀イタリア傭兵隊長の戦術改革／傭兵隊長の二つの側面

**第2章　フランチェスコ・ディ・ジョルジョの城砦設計と「戦術」**　フランチェスコ・ディ・ジョルジョの城砦：マルケの事例／フランチェスコ・ディ・ジョルジョの城砦：ナポリの事例／「重点防御」：フランチェスコ・ディ・ジョルジョの特徴

**第3章　ルネサンスの築城術における合理性追求と古典再解釈**　フランチェスコ・ディ・ジョルジョの都市計画／軍事的合理性：火器に対する防御と「側面射撃」／古典再解釈による築城術の変化／「築城術」に秘められた論理

**第4章　都市防衛を超えて**　バルダッサーレ・ペルッツィ：16世紀の「マルティーニ派」／「稜堡式築城」の成立／築城術の転機

**第5章　築城術と「国家の防衛」戦略**　「都市の防衛」から「国家の防衛」へ／マキアヴェッリのフィレンツェ城壁改修計画：政治思想家の築城術／国防戦略を担う築城術

**しらはた・しゅんすけ**…京都大学大学院博士後期課程修了、京都大学博士（人間・環境学）。関西学院大学客員研究員。

▼A5判・三〇〇頁／**定価五、八八〇円**

## ―茶会記をひもとく―
# 逸翁と茶会
**逸翁美術館編**

今春に開催された逸翁美術館特別展覧会の展示図録。逸翁（小林一三）は、三井銀行を退社し、箕面有馬電気鉄道（阪急電鉄）を起業した頃、茶道の師となる表千家の生形貴一宗匠と出会い、本格的に茶人としての道を歩み始める。茶の湯との出会いや、近代数奇者としての歩みを、残された茶会記をひもときながらオールカラーでたどる。

【4月刊行】　▼A4判・九二頁／**定価一、〇五〇円**

# 近代数寄者のネットワーク
**齋藤康彦著**
**茶の湯を愛した実業家たち**

茶会記録「茶会記」のデータ分析を通して政界・官界・実業界を横断するネットワークを描出。

**【内容】** 茶の湯の復興と近代数寄者の登場／新興財界人の台頭／大寄せ茶会と社会文化事業／キーパーソン高橋義雄の世界／近代数寄者の世代交代／近代数寄者の地域的展開　ほか

【2月刊行】　▼A5判・三〇八頁／**定価四、二〇〇円**

# 近代日本における書への眼差し
**髙橋利郎著**
**日本書道史形成の軌跡**

毛筆で書かれた肉筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版をはじめ、宝物調査や展覧会の列品、文化財関連の法令から探り、書道史形成の軌跡をたどる。

【1月刊行】　▼A5判・三〇四頁／**定価五、〇四〇円**

# 動物・植物写真と日本近代絵画
**中川馨著**

「明治後期から太平洋戦争以前の日本における動物・植物写真」を考察範囲とし、それらの写真集の歴史にもスポットをあてて概説。とくに、京都出身の動物・植物写真家、岡本東洋撮影の写真・写真集群や資料から、多彩な近代美術家たちと写真家との交流を浮き彫りにする。

【1月刊行】　▼A5判・二五六頁／**定価五、二五〇円**

# 近代茶道の歴史社会学
**田中秀隆著**

「伝統文化とは近代に自己変革に成功した文化である」との近代茶道史テーゼにもとづき、近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が「伝統文化」として認知される過程を考察。

**【内容】** 第一部 近代茶道の三つの転換期／第二部 伝統文化の解釈者たち／第三部 茶道への理論的アプローチ

▼A5判・四五四頁／**定価六、八二五円**

# 京都 伝統工芸の近代

**並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編**

【8月刊行予定】

京都における「近代」にあって、美術・工芸がどのような変容をとげて現代にいたっているのか。大きく「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場」の視点から、様々なトピックスや人物にまつわるエピソードを取り上げ概観する。口絵・関連地図や、各節には一目で年代を確認できる年表や関連図版を付し、視覚的にわかりやすく解説。

**主な内容（各節より抜粋）**

ワグネル／デュリー／佐倉常七・井上伊兵衛・吉田忠七／伊達弥助・中村喜一郎／近藤徳太郎と稲畑勝太郎／ジャカード・バッタン／化学染料／機械捺染／輸出陶磁器（粟田焼）／千總のビロード友禅／高島屋のビロード友禅／手描き友禅と型友禅／モスリン友禅／田能村直入と幸野楳嶺／如雲社と後素協会／竹内栖鳳／黒猫会・仮面会／工芸品における「古代文様」／京都における古陶磁研究／琳派回帰／創作陶芸／前衛陶芸／千總と西村總左衛門／高島屋の下絵／神坂雪佳と図案／モダンデザインから捺染絣図案へ／浅井忠／新井謹也・霜鳥之彦／津田青楓／京都府画学校／京都市立美術工芸学校と京都市立絵画専門学校／舎密局と染殿・織殿／京都織物会社／京都博覧会／内国勧業博覧会／祇園祭と時代祭／九雲堂／百貨店の展覧会　など

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

# 尾陽 第8号

**徳川美術館編**

徳川美術館による研究活動の成果。

【内容】建中寺所蔵の二挺の女乗物（小池富雄）／名古屋城西南隅櫓倒壊時期について（井上光夫）／新出史料「徳川家康自筆書状　禰津松鶴軒宛」について（原史彦）／加藤清正書状　下川又左衛門宛（文禄二年）八月八日（中島雄彦）／シンポジウム「初音の調度の秘密」報告

【5月刊】

▼B5判・一一二頁／定価三、一五〇円

# 国際デザイン史

**デザイン史フォーラム編**

**日本の意匠と東西交流**

一九九九・二〇〇〇年に開催された「国際デザイン史フォーラム」（大阪大学大学院文学研究科美学研究室主催）をもとに、デザイン史における日本と西洋諸国との交流を探る五六篇。

▼A5判・三二〇頁／定価三、〇四五円

# みやこの近代

**丸山宏・伊從勉・高木博志編**

京都大学人文科学研究所「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの八五篇。『京都新聞』の連載を再構成したもの。

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円

# 近代京都研究

**丸山宏・伊從勉・高木博志編**

本書は、京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れながら、近代史を中心に分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した「近代京都研究会」の成果。

▼A5判・六二八頁／定価九、四五〇円

# 岡倉天心の比較文化史的研究

## ボストンでの活動と芸術思想

**清水恵美子著**　【3月刊行】

岡倉天心のボストンでの活動に焦点をあてて考察。彼の生涯の活動に通底する思想や、ボストン社会で成そうとしていたことは、いかなるものだったのか。またボストンと日本における岡倉像を比較し、固定化され流布されている「岡倉天心」像を再検証する。

**内容**

序　章　渡米前夜―欧米美術視察旅行と「自然発達論」
第1章　岡倉覚三のボストン・ネットワーク構築
第2章　ボストン美術館中国日本美術部経営
第3章　オペラ台本『白狐』執筆への軌跡
第4章　『白狐』に見る思想と方法論
第5章　ボストンにおける岡倉覚三の受容と表彰
終　章　日米における岡倉像の比較
【資料】一八八三年 ジョン・L・ガードナーの日本旅行記

**しみず・えみこ**……お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了博士（学術）。専門は比較文化・美術史。現在、お茶の女子大学特任リサーチ・フェロー。

▼A5判・五四八頁／**定価一一、二三五円**

# フェノロサ社会論集

**山口靜一編**

当時の活字媒体を通じて発表された講義資料、宗教論を含む社会論のすべてを収め、明治日本に多様な影響を与えたフェノロサの実像に迫る。

▼A5判・三三〇頁／**定価八、一九〇円**

# 翻訳文学の視界

## 近現代日本文化の変容と翻訳

**井上健編**

明治維新後の日本にとって翻訳は、西洋文明に学び、近代国家の骨格を整えるための国家的事業であった。外国文学の翻訳は近代日本文学の形成に大きな影響を及ぼし、そして今日、すべての日本現代文学は、執筆される時点で翻訳されることを想定しているといえよう。

直訳と意訳、翻訳者の役割、原作者の言語意識……。言語が自国文化と深く関わる以上、翻訳文学はつねに複雑な要素をはらむ。最前線で活躍中の研究者たちが、比較文学・比較文化研究の立場から翻訳文学の諸相を語り可能性を探る。

**内容**

第Ⅰ部　近代日本の翻訳文学
明治二〇年代の翻訳と日本近代文学の《生成》（山田潤治・大正大学専任講師）／魔術的ファンタジーとSFの交叉点――春浪・『アラビアンナイト』・ヴェルヌ――（私市保彦・武蔵大学名誉教授）／リアリズムの翻訳　翻訳のリアリズム（柏木隆雄・大手前大学副学長）／文学の翻訳から翻訳文学へ――昭和初期のヘミングウェイ、プルースト翻訳を事例に――（井上健・東京大学教授）

第Ⅱ部　翻訳者の役割
現代語訳の日本語――谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳――（中村ともえ・静岡大学講師）／翻訳におけるジェンダーと〈女〉の声の再生――Naomi からKitchen まで――（金志映・東京大学博士課程）／翻訳者の透明性について――村上春樹訳『グレート・ギャツビー』をめぐって――（上西哲雄・東京工業大学教授）

第Ⅲ部　翻訳文学の位相
世界文学としての翻訳文学――ゲーテ、マルクス、シュピッツァ、モレッティ――（ソーントン不破直子・日本女子大学名誉教授）／翻訳の詩学・詩学の翻訳――近現代日本詩歌の英訳を中心に――（リース・モートン・東京工業大学教授）／原作者に《なる》――ボルヘス『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」から――（諸坂成利・日本大学教授）／母語の外に出ること、エクソフォニーの可能性をめぐって――多和田葉子と〈翻訳〉について――（依岡隆児・徳島大学教授）

▼A5判・三〇〇頁／**定価二、六二五円**

# 比較詩学と文化の翻訳

**川本皓嗣・上垣外憲一編**　大手前大学比較文化研究叢書8

◆国際比較文学会（ICLA）会長であった故アール・マイナー氏の追悼と、同じくICLA会長を務めた川本皓嗣大手前大学前学長の退職を祝うため、各国から集った研究者の共同論集。

【7月刊行】

◇内容◇

まえがき　**川本皓嗣**（大手前大学学術顧問）／序章　**スティーヴン・ソンドラップ**（ブリガムヤング大学教授）［川本玲子訳］

**第一部　比較詩学**

あやめも知らぬ　**川本皓嗣**／不忠な美人（Belle infidèle）**孟華**（北京大学教授）［陳凌虹訳］／漢俳三十年　**王暁平**（中国天津師範大学教授）／穆木天の前期詩論における日本の影響　**王中忱**（中国清華大学教授）／翻訳はいかに骨折するか、あるいは骨折をどう翻訳するか　**稲賀繁美**（国際日本文化研究センター教授）／沖縄民謡「てぃんさぐぬ花」と「アルカーデルトのアヴェマリア」**上垣外憲一**（大手前大学教授）／比較関連におけるノルディック・ケニング　**スティーヴン・ソンドラップ**［森道子訳］

**第二部　文化の翻訳**

インターカルチャー　**ユージーン・オーヤン**（インディアナ大学名誉教授）［山中由里子訳］／仏教のジェンダー平等思想　**植木雅俊**（東京工業大学非常勤講師）／東アジア獅子舞の系譜　**李応寿**（世宗大学校教授）／涙壺を求めて　**山中由里子**（国立民族学博物館准教授）／あとがき　**上垣外憲一**

▼A5判・二八〇頁／**定価二、六二五円**

## 大手前大学 比較文化研究叢書シリーズ既刊

### ①谷崎潤一郎と世紀末

**松村昌家編**

比較文学的見地から谷崎の文学に迫る。

▼A5判・二一二頁／**定価二、九四〇円**

### ②視覚芸術の比較文化

**武田恒夫　他編**

文学テキストと絵画・工芸などとの関わりを繙く。

▼A5判・二五六頁／**定価二、九四〇円**

### ③ヴィクトリア朝英国と東アジア

**川本皓嗣・松村昌家編**

近代化過程における日本・中国・朝鮮と英国との文化交流誌

▼A5判・二七六頁／**定価三、三六〇円**

### ④夏目漱石における東と西

**松村昌家編**

西洋的概念と東洋的概念の葛藤など漱石文学論を収録。

▼A5判・二〇八頁／**定価二、九四〇円**

### ⑤阪神文化論

**川本皓嗣・松村昌家編**

文学、歴史から阪神文化に触れる。

▼A5判・二九〇頁／**定価三、三六〇円**

### ⑥一九二〇年代東アジアの文化交流

### ⑦一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ

**川本皓嗣・上垣外憲一編**

一九二〇年代の東アジア文化交流の様相を明かす。

Ⅰ　▼A5判・二三二頁／**定価二、九四〇円**

Ⅱ　▼A5判・二七四頁／**定価二、六二五円**

# 近代日本高等教育体制の黎明

## 交錯する地域と国とキリスト教界

田中智子著

【3月刊行】

医学、洋学一般を教育する場がいかに設置・運営されてきたか。一八七〇年代初頭から一八九〇年代初頭までを対象とし、各地域の高等教育体制の展開過程を、府県という地域行政主体、文部省という国の行政主体、伝道を志すキリスト教界、という三勢力の交錯のうちに描く。高等教育史を府県・国・民間勢力の相互関係史として再構成する一書。

内容

序―未分化時代の地域的力学

**第Ⅰ部　キリスト教勢力の出現――地域史としての宣教史**

第一章　神戸における近代医療の揺籃とJ・C・ベリー来港

第二章　医療宣教師ベリーと兵庫・飾磨県の行政・社会

第三章　岡山県における医学・洋学教育体制の形成とアメリカン・ボード

第四章　京都府下の医学教育態勢と新島襄の医学校設立構想

第五章　大阪官立学校とキリスト教

**第Ⅱ部　文部省の学校の登場――地域史としての官立学校史**

第六章　第三高等中学校設置問題再考

第七章　高等中学校医学部時代の到来

補　章　官立学校誘致現象の生成と変容

第八章　府県連合学校構想史試論

第九章　「官立学校」概念の輪郭

終　章　諸学校令下の高等教育体制再編

結―これからの研究に向けて

**たなか・ともこ**……京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学（日本史学専攻）、京都大学博士（文学）。現在、同志社大学人文科学研究所助教。

▼A5判・四四八頁／**定価七、三五〇円**

# 増補改訂　西村茂樹全集

古川哲史監修／日本弘道会編　【全12巻・既刊11冊】

明治に急激な近代化・西洋化が進む中、保守主義思想家として倫理・道徳の問題に取り組んだ西村茂樹。その学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道徳論』の初版本など思想史的にも貴重な著書を初めて公刊。道徳学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髄に迫る。

【4月刊行】

**第8巻**　訳述書4　▼A5判・八一八頁／**定価一八、九〇〇円**

**既刊11冊　揃定価二〇四、七五〇円**

# 韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著　**佛教大学研究叢書⑧**

韓国併合前後の、修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育をとりあつかう。

▼A5判・三〇〇頁／**定価五、八八〇円**

# 明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

二二八事例と一三参考事例の概要および参考文献を収載。豊富な実例を整理・検討することによって明治国家の特質を考察する。

▼B5判・五七六頁／**定価一三、六五〇円**

# 近代医療のあけぼの

## 幕末・明治の医事制度

青柳精一著

**第24回矢数医史学賞（日本医史学会、2012年）受賞！**

長年医療ジャーナリズムに従事してきた著者が、幕末・明治の医事制度と社会背景について膨大な史料をもとに考証する。

▼A5判・五七六頁／**定価四、九三五円**

# 一九世紀の豪農・名望家と地域社会

【8月刊行予定】

福澤徹三著

中核的豪農と一般豪農の経営レベルの比較、金融活動の分析を中心に、畿内・信濃の地域間比較の視点も加え、その生業・営為を近世・近代を通じて明らかにする。

※ 内容

序　章　本書の課題と構成

第Ⅰ部　一九世紀の畿内における豪農金融の展開と地域社会状況

第一章　近世後期の畿内における豪農金融の展開と地域

第二章　畿内の無担保貸付への私的所有権確立の影響

第三章　地域金融圏における地域経済維持の構造

第四章　幕末期河内の地域社会状況

補　論　大坂本屋・正本屋利兵衛の「武鑑」「在方本」の出版活動

第Ⅱ部　信州における近世後期の金融活動

第五章　文化・文政期の松代藩と代官所役人の関係

第六章　近世後期の信濃国・越後国における豪農の広域金融活動

終　章　本書の総括と今後の課題

# 畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

近年整理が進められている岡田家文書を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明する。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

ふくさわ・てつぞう…一九七二年生。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。現在、すみだ郷土文化資料館勤務。

▼A5判・三二〇頁／定価六、三〇〇円

# 近世社会と百姓成立

構造論的研究

佛教大学研究叢書1

渡邊忠司著

百姓の観点から百姓自らが創出した「成立」の条件と構造を年貢負担と村内の組編成、質入の検討により解明。

▼A5判・三一〇頁／定価六、八二五円

# 熊本藩の地域社会と行政

近代社会形成の起点

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

近世地域社会論の成果と課題を踏まえて、西国大藩としての熊本藩領内の地域社会像を描き出す意欲的論集。

▼A5判・四二〇頁／定価九、四五〇円

# 幕末維新期の陵墓と社会

上田長生著

陵墓に政治的意味を付与し、祭祀を行おうとする政治権力（朝廷・山陵奉行）と在地社会の軋轢・葛藤が最も明確に現れた陵墓管理・祭祀に注目。

▼A5判・四〇〇頁／定価六、五一〇円

# 文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良の水木コレクションを分析。日本史学・考古学等を横断する一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

# 鉄道日本文化史考

宇田正著

「文化の鏡」としての鉄道から、日本人の内面的形成に果たした文化的役割を明らかにする。

▼A5判・三五二頁／定価五、七七五円

# 京都の歴史災害

吉越昭久・片平博文編

【8月刊行予定】

歴史上、京都を襲った災害を種類別にとりあげ、被災範囲や規模の復元、特徴や被害発生の社会的背景の分析、また人々の取り組みなどをさまざまに論じる。地理学、歴史学、工学など多様な分野の研究者による、立命館大学G-COEプログラム「文化遺産の防災」プロジェクトの成果。

内容

Ⅰ総論
歴史災害の復元から明らかにされる減災の知恵（吉越昭久）歴史災害の可視化（塚本章宏）

Ⅱ水害
近世における京都鴨川・桂川の水害（高橋学）一七世紀後半における賀茂川の洪水と堤防の建設（片平博文）京都・鴨川の堤防建設にみる近世の治水観（吉越昭久）

Ⅲ火災
近世京都の大火（渡邊泰崇）江戸時代の京都・公家町における災害と復興（冷泉為人）幕末期の戦乱と火災（奈良勝司）大正期京都の火災の復原（朝田健太）京都市における歴史的建築物の火災履歴の復元（田中哮義）

Ⅳ震災
京都周辺の活断層からみた地震の環境と長期予測（岡田篤正）遺跡と史料からわかる地震災害（寒川旭）京都御所の地震殿と歴史災害（川崎一朗）近世京都における地震災害（西山昭仁）文政京都地震（北原糸子・大邑潤三）

Ⅴ土砂災害
京都東山の土砂災害（諏訪浩）近代の水害と土砂災害（赤石直美）

Ⅵ気象災害・災害と社会
近世京都の重大火災と気象災害（水越允治）近代の医療と防災（鈴木栄樹）「迷子しるべ石」をめぐって（小林丈広）

〔コラム執筆者〕山崎有恒、片平博文、伊津野和行、深川良一、中谷友樹

▼A5判・三〇〇頁／定価二、四一五円

## 京都大地震　文政13年の直下型地震に学ぶ

三木晴男著

文政一三年七月二日、京都を中心として震度六・四と思われる直下型地震が起った。建造物の倒壊、火災、流言と、公家・武士・町人を襲ったパニック。一五〇年前の地震が現代に語りかける教訓を、地震学界の重鎮が語る震災ドキュメント。

▼A5判・三三四頁／定価二、九四〇円

## 京都　高瀬川　角倉了以・素庵の遺産

石田孝喜著

近世京都の町づくりと経済的発展に大いに寄与した高瀬川に、限りない愛着と関心を持ち、歴史に埋もれた史料をねばり強く探索し研究を続けてきた著者が、運河開削の歴史をたどり、舟入や橋の変遷など、多方面からその歴史と文化を描く。図版多数。

▼A5判・二五〇頁／定価二、三一〇円

## 京の鴨川と橋　その歴史と生活

門脇禎二・朝尾直弘編

歴史都市京都のシンボル的存在である鴨川とそこに架かる橋について、各時代の様子を具体的に明らかにし、人々の暮らしの中でどのような意味を持っていたかを探る。

▼四六判・二五〇頁／定価二、三一〇円

## 近代地方政治と水利土木

服部敬著

淀川・安威川・神崎川の水利構造の変遷と分析、沿岸住民の治水運動と中央・地方議会と政党の対応、近代化の意味と中央集権的近代国家の性格を地域史の視座から問う。

▼A5判・四〇〇頁／定価六、九三〇円

## 阪神・淡路大震災と歴史的建造物

加藤邦男編

直下型大地震が招いた建築物被害のうち歴史的建築物の被害状況を把握し、被災地区における復興、復元、修理補強の方策を探るのみならず、文化財建造物の将来にわたる保全、利活用にさまざまな提言を示す。

▼B5判・二八〇頁／定価八、一九〇円

# 近世上方歌舞伎と堺

佛教大学研究叢書⑭

斉藤利彦著

【3月刊行】

従来より盛んである元禄期を中心とした近世上方歌舞伎研究に対し、本書では、特に化政期から幕末期、上方歌舞伎の地域的展開や興行史的検討という観点から堺における歌舞伎興行の全貌を解明する。

京・大坂の興行、さらには大芝居、中ゥ芝居の役者たちの動向をも照射し、上方歌舞伎の地域的展開の一端を明らかにした。

▼A5判・三四八頁／**定価六、六一五円**

# 松岡恕庵（じょあん）本草学の研究

太田由佳著

【3月刊行】

近世日本、本草学が博物学的に発展してゆくなかで一翼を担った、京都の本草家松岡恕庵を主題に据え、その学問の実像に迫る本格的研究書。

【内容】

生涯と学問／恕庵本草学の特色／学問観／没後―門人たち

▼A5判・三九〇頁／**定価七、八七五円**

**おおた・ゆか**…一九八二年福岡県生。二〇一一年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。現在、日本学術振興会特別研究員PD。

# 近世史小論集

古文書と共に

藤井譲治著

【4月刊行】

日本近世政治史研究の泰斗である著者が、研究をはじめたころからごく近年にいたる間に書いた小論のうち、あまり目にとまらないところに収められたもの、入手の困難なものの中で著者の主要な研究の前提、あるいはその後の展開にかかわる論考を集めた。約40年におよぶ研究の軌跡を振り返る。

▼A5判・四九〇頁／**定価六、三〇〇円**

**ふじい じょうじ**…一九四七年、福井県生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。二〇一二年三月、京都大学を退職。

# 戦国大名権力構造の研究

村井良介著

【3月刊行】

戦国大名権力の動向は、近世に向けた一貫した過程と捉えることができるのか？本書は、主に毛利氏を事例に、戦国大名、「戦国領主」の重層的な権力構造の分析から、戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描くことにより解明する。

【内容】毛利氏の山陰支配と吉川氏／毛利氏の山陰支配と小早川氏／毛利氏の「戦国領主」編成とその「家中」／一六世紀後半の地域秩序の変容／戦国期における領域的支配の展開と権力構造

▼A5判・四五二頁／**定価七、三五〇円**

# 中世文化と浄土真宗

**8月刊行予定**

**今井雅晴先生古稀記念論文集編集委員会　編**

常に日本中世宗教史研究を先導してきた、筑波大学名誉教授・今井雅晴先生の古稀を記念して、国内のみならず海外にもおよぶ幅広い層の研究者が、親鸞と浄土真宗史研究の進展を期した最新研究28本を寄せた大冊。

▼A5判・六六〇頁／**定価一三、六五〇円**

**内容**

緒　言　今井雅晴（筑波大学名誉教授）

親鸞伝の新展開

**一　中世文化の中の浄土真宗**

空海の御影とその儀礼環境——中世密教の視覚性と正統性の関連について——　阿部龍一（ハーバード大学教授）

穢と不浄をめぐる神と仏　山田雄司（三重大学教授）

覚如と呪術信仰——治病と臨終に対する姿勢をめぐって——　小山聡子（二松学舎大学准教授）

真宗三尊考　飛田英世（茨城県立歴史館首席研究員）

**二　法然から親鸞へ**

建永の法難と九条兼実——法然伝の検討を通して——　平　雅行（大阪大学教授）

親鸞の「転入」の解釈学【英文】　ヒロタ・デニス（龍谷大学教授）

悲しき学び　田村晃徳（武蔵野大学非常勤講師）

親鸞と良忠——その教化と教説——　永村　眞（日本女子大学教授）

法然の残影——覚如と存覚のあいだに——　市川浩史（群馬県立女子大学教授）

**三　親鸞の思想**

『教行信証』の不思議さの読解（その一）——「化身土」の「弁正論」の引用について——　張　偉（同朋大学准教授）

親鸞の聖徳太子観　佐藤弘夫（東北大学教授）

親鸞における臨終行儀の否定【英文】　ジャクリーン・I・ストーン（プリンストン大学教授）

「二河白道の譬喩」伝播の鳥瞰的考察　山本浩信（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員）

田辺元の『懺悔道としての哲学』における親鸞解釈　末木文美士（国際日本文化研究センター教授）

**四　親鸞とその家族**

浄土真宗における恵信尼について【英文】　ジェームズ・C・ドビンズ（オーバリン大学教授）

恵信尼と同時代を生きた三善氏　樋川智美（真宗文化センター会員）

「本願寺」成立の再考　林　蕙如（岡山大学大学院博士課程）

真宗史における善鸞伝私考　御手洗隆明（真宗大谷派教学研究所研究員）

存覚、顕密寺院と修学文化【英文】——一四世紀における唱導の報恩言説、諸宗兼学及び浄土教聖教に関する一考察——　ブライアン・小野坂・ルパート（イリノイ大学教授）

**五　親鸞とその門弟**

初期真宗門徒における師と弟子——門徒形成の契機として——　植野英夫（千葉県文化財課主任文化財主事）

親鸞門弟中における「沙門」と「沙弥」　山田雅教（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員）

佛光寺発展の意義——了源・存覚を中心として——　楠　正亮（興泉寺住職）

**六　浄土真宗の展開**

本願寺歴代宗主の伝道——善如期から存如期を中心にして——　髙山秀嗣（東京学芸大学非常勤講師）

「御文」にみる専修念仏言説の一特質　神田千里（東洋大学教授）

蓮如の善知識観——中世真宗教学における教導者観の展開——　黒田義道（浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員）

天文期加賀における「超・本両寺体制」の再検討——超勝寺の動向を中心に——　大溪太郎（早稲田大学大学院博士課程）

北方地域と浄土真宗　佐々木馨（北海道教育大学教授）

今井雅晴先生履歴年譜・業績目録

編集後記

# 阿蘇下野狩史料集

**飯沼賢司編**

「下野狩神事」は、源頼朝の富士の巻狩りの手本となったとされており、阿蘇宮最大の重要行事であった。その史料である、『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻。

永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』の解題
阿蘇家所蔵下野狩関連史料の解題

**一　永青文庫所蔵下野狩関連記録**

1　下野狩日記　上（一）
2　下野狩日記　下（三）
3　下野狩旧記抜書（一）

**二　永青文庫所蔵下野狩関連文書**

1　下野三狩矢野茂左衛門覚書写
2　板書
3　宮内権大輔真楫書状
4　下野之三狩書物之抜書写
5　下野狩由来写

**三　阿蘇家所蔵下野狩関連史料**

1　天保十三年下田能延へ送る抜書写
2　下野御狩記録抜書写
3　下野御狩三物替事
4　下野之三狩書物抜書写
5　下野狩并山神祭作法写
6　下野狩根本記写
7　下野狩由来記写
8　下野狩再興願記録
9　鷹山下野御狩鹿立鹿蔵地名比定書

【6月刊行】　▼A5判・三二八頁／**定価七、八七五円**

# 祇園祭の中世　室町・戦国期を中心に

**河内将芳著**

【6月刊行】

祇園会の見物という行為の検討により、その特質をうきぼりにし、さらに神輿渡御の神幸路・御旅所と都市空間との関係、戦国期の祇園祭の再興の意味や、「闘取」の実態についても解き明かす。

▼A5判・三六〇頁／**定価四、七二五円**

# 風俗絵画の文化学Ⅱ

**松本郁代・出光佐千子・彬子女王編　虚実をうつす機知**

絵画の制作に関わった人々の複雑に絡み合う視線の交錯を文化的に考察し、そこにあらわれた「機知」――虚実を往来する機微や感性の「かたち」――を明らかにしていく15篇。

【3月刊行】　▼A5判・四五〇頁／**定価七、三五〇円**

# 天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

**三島暁子著**

【3月刊行】

天皇家・将軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下楽人豊原氏の南北朝期から約一五〇年にわたる活動に着目し、公・武・楽家という三者の関わりのなかから、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。

▼A5判・三六〇頁／**定価六、九三〇円**

# 中世蹴鞠史の研究　鞠会を中心に

**稲垣弘明著**

室町期以降の蹴鞠会の挙行形態の歴史を体系的に論じた一書。新興武家層を参会者として加えた場でより遊興性を加味しながら変容し、「故実」に代わって「新儀」が定着すること、それが近世の家元制度の萌芽と認められることなどを明らかにした。

▼A5判・三〇〇頁／**定価五、七七五円**

# 室町水墨画と五山文学

**城市真理子著**

【3月刊行】

岳翁と東福寺僧了庵桂悟の関係を手がかりに、詩画軸制作のありようを探り、雪舟と関連づけることで、周文の実像に迫ることを試みる。さらに禅僧の文人的営為を反映するものとして、周文筆と伝えられる詩画軸や煎茶図様の水墨画について考察する。

▼A5判・三三六頁／**定価六、三〇〇円**

皇學館大学創立百三十周年・再興五十周年記念

## 訓読 註釋 儀式 踐祚大嘗祭（せんそだいじょうさいぎ）

皇學館大学神道研究所編

◎『儀式』全十巻（平安前期の勅撰儀式書とされる『貞観儀式』とほぼ考定）のうち、現存する巻二・三・四（「踐祚大嘗祭儀　上・中・下」）は、大嘗祭の具体的な全容がうかがえる最古で最詳の規定である。

◎本書は、皇學館大学神道研究所が、昭和五十年九月～平成二十三年三月の長期にわたり、儀式講読会（のち大嘗祭研究会）で取り組んだ訓読・注釈研究の成果。

【内容】儀式　踐祚大嘗祭儀　上・中・下（原文翻刻・訓読・注釈・校異）／「儀式　踐祚大嘗祭儀」考（加茂正典）／参考図／注釈索引

【7月刊行】　▼B5判・九〇〇頁／定価一五、七五〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

## 九条家本延喜式（全五巻）

東京国立博物館所蔵の九条家本延喜式を、紙背文書も含めて高精細印刷により影印出版。朱書き部分は二色刷り。

▼A5判・四六〇・五四〇頁／各定価一五、七五〇円

第一回配本（一）　巻一・二・四・六・七甲・七乙

第二回配本（二）　巻八～十一　【6月刊行】

## 日本古代典籍史料の研究

鹿内浩胤著

史書・法制史料・儀式書・部類記などの基本的な日本古代史料を対象に、「文献学的研究」「書誌学的研究」の二部構成で研究の方法論を提示。

▼A5判・三七六頁／定価七、〇三五円

## 平安貴族社会の秩序と昇進

佐古愛己著

律令国家体制が維持されていた平安初期から、平安末・鎌倉初期までを射程として、貴族社会の構成と編成原理を解明する大著。

▼A5判・五七二頁／定価八、一九〇円

## 王権と神祇

今谷明編

天皇制や大嘗祭などの実態的な研究を積み重ねた論集。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

▼A5判・三四八頁／定価六、八二五円

## 日本古代即位儀礼史の研究

加茂正典著　思文閣史学叢書

大嘗祭をはじめ、剣璽渡御儀礼・即位式といった広義の即位儀礼をとりあげ、桓武・平城朝における即位儀礼の儀式的意味と歴史的意義を明らかにする。

▼A5判・四八〇頁／定価九、〇三〇円

## 後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

後鳥羽院政期の宮中儀式・行事である公事と修法・寺社参詣参籠などの宗教儀礼が果たした政治的役割を個別具体的に検証。

▼A5判・三二八頁／定価六、三〇〇円

# 御堂関白記全註釈

## 第1期・全8冊

山中裕編

**待望の復刊**

第1期、第2期の全16冊が完結したのを機に、入手困難な第1期（国書刊行会・高科書店発行）の全8冊を復刊。なお今回の復刊にあたり、寛弘6年については、註釈に大幅な改訂を加えた。

| | | |
|---|---|---|
| **寛弘元年** | 二八八頁／**定価八、五〇五円** |
| **寛弘2年** | 二〇二頁／**定価五、九八五円** |
| **寛弘6年** | 一七〇頁／**定価五、〇四〇円** |
| **長和元年** | 三〇〇頁／**定価八、八二〇円** |
| **長和2年** | 三九八頁／**定価一一、六五五円** |
| **寛仁元年** | 二六八頁／**定価七、八七五円** |
| **寛仁2年 上** | 一九二頁／**定価五、六七〇円** |
| **寛仁2年 下～治安元年** | 一九八頁／**定価五、七七五円** |

**【8月一括配本予定・分売可】**

# 御堂関白記全註釈

山中裕編

**〔第2期・全8冊〕**

**待望の完結**

本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。

| | | |
|---|---|---|
| 第1回配本 | **長和4年** | 定価六、三〇〇円 |
| 第2回配本 | **寛弘3年** | 定価五、七七五円 |
| 第3回配本 | **寛弘7年** | 定価五、七七五円 |
| 第4回配本 | **寛弘4年** | 定価五、七七五円 |
| 第5回配本 | **寛弘8年** | 定価六、八二五円 |
| 第6回配本 | **寛弘5年** | 定価五、二五〇円 |
| 第7回配本 | **長和5年** | 定価一二、〇七五円 |
| 最終回配本 | **御堂御記抄 長徳4年～長保2年** | 定価五、二五〇円 |

# 禁裏・公家文庫研究 第四輯

田島公編

**【3月刊行】**

▼B5判・四〇四頁／**定価九、六六〇円**

近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第四輯。今回は柳原家旧蔵本、陽明文庫所蔵資料の目録の翻刻も収録。

**【既刊】**

| | | |
|---|---|---|
| **第一輯** | ▼B5判・三九〇頁／**定価一〇、二九〇円** |
| **第二輯** | ▼B5判・四〇六頁／**定価一〇、二九〇円** |
| **第三輯** | ▼B5判・四九六頁／**定価一二、三九〇円** |

# 栄花物語（えいが）・大鏡（おおかがみ）の研究

**山中裕著**

『栄花物語』は非常に複雑な本質を有するものである。六国史・新国史および『源氏物語』の後に生まれたものとして、その影響を多分に受けていると同時に、その内容も非常に多くの要素を含んでいる。しかし、従来『栄花物語』はとくに国文学の分野でとりあげられ、歴史学の方面からの研究は少ない。本書は『栄花物語』に内包される歴史書としての特徴を考究し、かつ『大鏡』の歴史的意義についても論究。従来からの歴史物語という分野に収まりきれない可能性を提示する。

**内　容**

序　章　『栄花物語』概観
第一章　世継および世継物語
第二章　『栄花物語』の編纂
第三章　『栄花物語』の歴史と文学
第四章　『栄花物語』と王朝政治
第五章　『大鏡』の歴史的意義
第六章　『栄華物語』の歴史叙述―年紀表現の方法―
第七章　『栄花物語』にみる藤原道長の周辺
書　評　福長進著『歴史物語の創造』

やまなか ゆたか…一九二一年東京生まれ。文学博士。東京大学史料編纂所教授・関東学院大学教授・調布学園女子短期大学教授等を歴任。

**【８月刊行予定】**　▼Ａ５判・四〇〇頁／**定価七、五六〇円**

# 古記録と日記　全２冊

**山中裕編**

従来古記録は歴史学、「かな」の日記は国文学の分野で扱われてきたが、本書では日記という大きな見地から平安朝の古記録と日記文学の本質を解明。　▼Ａ５判・各二五二頁／**各定価三、〇四五円**

# 平安時代の古記録と貴族文化

**山中裕著**　**思文閣史学叢書**

古記録・儀式書・かなの日記・歴史物語等の根本史料を基に、摂関政治の本質および年中行事を主とする平安貴族文化の実態を説く。　▼Ａ５判・五一〇頁／**定価九、二四〇円**

# 源氏物語の史的研究

**山中裕著**　**思文閣史学叢書**

王朝文化・有職故実研究の第一人者が源氏物語を史的に読み解く。　▼Ａ５判・四七〇頁／**定価九、六六〇円**

# 歴史のなかの源氏物語

**山中裕編**　**シリーズ古典再生③**

『源氏物語』のなかに、この時代の世相が、どのように反映しているか。一五人の気鋭が、歴史のなかの源氏物語について最新の研究成果を展開する。　▼四六判・三一〇頁／**定価二、三一〇円**

# 摂関時代文化史研究

**関口力著**　**思文閣史学叢書**

藤原道長の時代を中心に取り上げ、古記録・日記類をもとにして、摂関時代全盛期に生きた人物、および彼らをはぐくんできた社会について考察。　▼Ａ５判・四八八頁／**定価九、四五〇円**

――思文閣グループの逸品紹介――

# 美の縁

び　よすが

この絵本が刊行された安永五年（一七七六）はいわゆる田沼時代に位置し、本書のような極めて豪華な多色刷の絵本や浮世絵、狂歌や黄表紙等の諸文学、蘭学等様々なジャンルの文化が大きく花開きました。

本書はこの時代を代表する浮世絵師、勝川春章と北尾重政の両絵師が競作した木版彩色刷の絵本で、四季と員外に部立てし吉原遊女たちの艶姿を描き出したもので、浮世絵絵本中、最高の名作ともいわれています。版元は蔦谷重三郎（つたやじゅうざぶろう）。かの「写楽」を世に送り出したことで夙に知られており、様々な本や浮世絵を続々と出版し文化を陰から支えた功労者といっても過言ではありません。

## ❖ 青楼美人合姿鏡（せいろうびじんあわせすがたかがみ） ❖

内容は、町名・青楼別に吉原の名妓一六〇余人を描いたもので、各妓楼自慢の名妓たちを一覧することができ、また、四季の風物とともに、投扇興・金魚鉢・双六・カルタなどの座敷遊びに興じる姿が描かれ、当時の風俗を知る上でも極めて貴重な資料となっています。また下巻には「巻中諸君四時詠唫」と題し、各名妓たちの詠じた発句が掲載され、遊女の教養の高さをも示しています。

このような絵本は当時の衣服や調度品、窓から見える景色等を当時のままに伝えてくれており、江戸時代を知る縁となり興味が尽きません。

（思文閣出版古書部・阿部尚平）

思文閣墨蹟資料目録

# 和の美

古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町355
**TEL(075)531-0001** FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

# 美術品を売る、買う。「思文閣大交換会」がいちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年４回の大入札会。美術品を売りたい方、買いたい方双方にご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは
思文閣京都本社
TEL (075)531-0001
mail info@shibunkaku.co.jp

# 思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年４回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

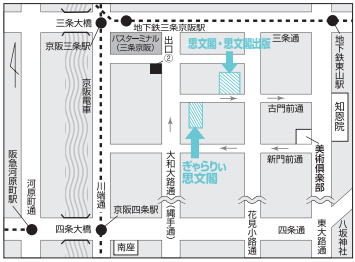
百怪図巻　全一巻

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町355
**TEL(075)752-0005** FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

# ぎゃらりい思文閣

ぎゃらりい思文閣では、「ようの美」をコンセプトに、陶磁器や漆器など様々な分野の工芸品を取り揃えています。また、現在活躍されている多彩な作家の個展や企画展を随時開催しています。ぜひ一度お立ち寄りさせませ。

ご来店見取り図




〈京阪〉三条　〈地下鉄東西線〉三条京阪下車
（出口②）　徒歩約３分　〈市バス〉三条京阪

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町386
**TEL(075)761-0001** FAX(075)533-1779
http://www.shibunkaku.co.jp/gallery/
gallery@shibunkaku.co.jp